

山と博物館

第36巻 第5号 1991年5月25日

大町山岳博物館



鳴き声と配色にほれ惚れするオオルリ 写真と文 田中宏一郎

雄は目のさめるようなルリ色をした鳥で、四月下旬から五月上旬にかけて日本に渡ってきます。繁殖期には、高い木の梢や枝先に止まって大きな声でさえずりますが、その鳴き声がすばらしいという点で、日本の三鳴鳥の一つに数えられています。ちなみに他の二種はウグイスとコマドリです。

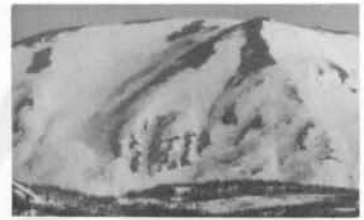
この鳥は谷沿いのよく繁った林に生息しているので、谷や傾斜地の林道を歩いていてその美しい姿やきれいなさえずりを耳にすることが出来ます。

鳴き声は人によっていろいろな聞きとれるのですが、ビヨビヨキヨキヨキヨ、ビイビイチーチーリリなどはその例です。雌雄異色ですが、雄の配色は背面は濃い青色で紫がかり特に額から前頭にかけて明るい空色で輝いて見えます。また腹面は白く、喉から顔、胸の黒いのが特徴で、いっそう青色を引き立てています。地方によってはヤマツバメなどとも呼ばれています。雄の美しいのに比べ、雌はごく地味な配色をしています。野鳥の雌は概して目立ちにくい色をしています。これは敵の目を欺くためのものでしょうか。

切りたった崖のへこみや大木の根本などにコケを主材料としたお椀形の巣を作りますが、時にはジュウイチ(ホトトギス科)の托卵相手にされることもあります。

近年は山の中まで人の手が入り、小鳥たちのすみかが荒されています。小鳥たちが安心してすめる環境を確保したいものです。

(池田町在住)



大蓮華山、乗鞍岳の6つの雪形

乗鞍岳の鶏

安曇野の雪形

大町山岳博物館

雪形は山と雪と太陽が造り出す。長かった冬が雪代水となって融け出すと、北アルプスの山肌には岩と雪の織りなす紋様

が広がっていく。無数の春のしるしである。山に生業を求めず、もっぱら山を仰ぎ田畑を耕す里人が、そこから身近かな人や動物になぞらえた雪形を見つけ、生活の智慧としてまた遠い視線の楽しみとして伝承してきた。雪形には残雪によって描き出される白いものと、残雪の中に岩肌を黒く浮き立たせるものがある。

ここでは山と里と人の暮らしが足なみをそろえていたところからの、北アルプス東麓の伝統的雪形のいくつかを紹介したい。

小蓮華山・乗鞍岳のさまざまな雪形
白馬岳の支尾根ともいえる両山の南面には、向かって左から二人の種まき爺さん、仔馬、嫁岩、鶏、そして三人目の種まき爺さんと、合計六つもの雪形が伝えられている。まさに雪形の饗宴の感がある。

このうち最も識別が容易で、大町市街からも遠望できるのは乗鞍岳頂上直下に白く浮き出る鶏と、大蓮華山の主稜線の東端、雷鳥坂にあたる稜線下に黒く出る仔馬である。鶏に關してはカモシカに見立てる人も多い。確かに四肢と角も認められ、説得力がある。

〔見ごろ〕四月中旬～五月中旬

白馬岳の代かき馬

爺ヶ岳、蝶ヶ岳とともに雪形にちなんで名づけられた山の代表格である。雪形は小蓮華方面へ稜線を下った三国境の

下方に黒く現われる。まさに障害物を飛び越そうとする躍動感あふれる農耕馬の姿である。かつてこの雪形も種まき爺さん同様、田植えの準備である代かき作業の適期を知らせる「代かき馬」として、その役割りは大きかった。従ってこの山は本来は代馬岳のほずである。ところが明治から大正にかけて、全国を網羅する初の五万分の一地形図を完成した陸地測量部が白馬のあて字を採ってから、白馬岳になってしまったといわれる。

黒い代馬が白馬になり、この山の所在地である代馬村ならぬ白馬村が全国有数の観光地であることを考えると、時代の趨勢を思い知る。〔見ごろ〕五月初旬

五竜岳の武田菱

かつてこの地を支配した武田信玄の紋所である武田菱そっくりの雪形が頂上直下の岩壁に現われる。山名の由来は、越中側から見て立山の後ろの山、つまり後立山と呼ぶようになったという説(鹿島楯こそ後立山だという説もある)、この雪形「御菱」からの転化だとする説などいくつかが知られている。この地ではかつて岬々たる悪絶の岩壁をヒシと呼んでいたように、小蓮華山の北面の岩壁には蓮華菱としてその言葉を残している。地形と雪形が一致して面白い。

この雪形は北アルプス東麓では白馬村内でしかも明瞭な割り菱は短期間しか望むことができない。〔見ごろ〕四月初旬



五竜岳の武田菱

白馬岳の代かき馬



爺ヶ岳の北の爺さん(右)と南の爺さん

鹿島槍ヶ岳の鶴(左)と獅子

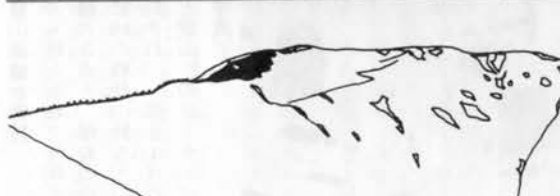
爺ヶ岳の二人の種まき爺さん
種まきをする人に見立てた雪形は各所に伝えられているが、山名として今に残るこの爺さんは代表的存在である。
ひとりは大町周辺に伝えられている爺さんで、南峰と本峰の鞍部直下に現われる。その格好は様々に伝えられているが、一般に早い時期には笠をかぶり、ザルをかかえた姿に、やがて雪どけが進むにつれて鎌をかかえた姿に、柄な姿へと変わっていくという。この爺さんは南へ行くほど見えなくなる。
もうひとりとは南安曇を中心に伝えられる爺さんで、先の爺さんより早く南峰直下に現われる。また、田淵行男氏の『山の紋章 雪形』によれば、本峰直下には爺さんに「ひと足運れて応援に馳せ参じる『婆さん』と称している」雪形も伝えられているとのことである。
同じ爺ヶ岳に主が二人いるのは、里から見える位置関係だけでなく、出現の時期がちがうからだろうか。苗代に種をまく適期を知らせたという農耕暦の役割りを担っていた二人の爺さんの雪形は、安曇野の北と南の春の訪れの差、風土の差を代表しているようだ。
〔見ごろ〕 北の爺さん 四月中旬～五月初旬
南の爺さん 三月下旬～四月下旬

鹿島槍ヶ岳の鶴と獅子
大町市街以南から望む双耳峰と吊り尾根に均整のとれた美しさを感じる人は多い。
鶴は南峰直下、ダイレクト尾根に首を伸ばし飛び立とうとしている姿に現われる。残念ながら鶴らしい長い足はなく、白鳥のようである。一方獅子は吊り尾根の直下に鶴に向かって山をかけた下姿に現われる。従ってこの山が最も整って見える安曇野一円がまた、雪形鑑賞にも好適といえる。
古くはこの上り鶴と下り獅子を望める地域で、「鶴ヶ岳」とか「獅子ヶ岳」とも呼ばれていたというのも納得のいくところである。
〔見ごろ〕 四月下旬～五月中旬

蝶ヶ岳の蝶
雪形が山名となった山として有名である。白い蝶を見ることが出来るのは穂高、豊科近辺に限られるが、平地から見ただけなら稜線が落ちる南端に、しかも独立して大きく現われるので、すぐに見つけることができる。北アルプスの雪形の中でも最も長命な雪形のひとつである。田淵氏前掲書によれば、中央部の「背筋」がほどよく割れて完成期をむかえる。やがて様々な黒い斑点を広げて徐々に消え、この雪形の出現場所は常念山脈随一のお花畑となつて本物の高山蝶の舞台となるのである。
〔見ごろ〕 五月初旬～六月初旬

雪形は山と雪と太陽の造形であり、かつて持っていたその意味は薄れつつあつても、毎年変わるごとくその姿を現わす。
今年は五月初めの降雪で、見ごろが長い。改めて伝統的な雪形をよすがに季節を味わうもよし、自分だけの雪形をさがすのもよい。
〔参考文献〕
『山の紋章 雪形』 田淵行男著 学研
『信州山岳百科I』 信濃毎日新聞社編

常念岳の常念坊と万能歟
山名の由来は、坂上田村麻呂に討たれた八面大王の重臣だった常念坊がこの山の岩屋に移り住んだからだとか、穂高町の満願寺の住職の常念坊が開山したからだとか、いくつもの説が伝えられている。
常念坊の雪形は前常念頂上の斜め右下に黒く現われる。適期にはたいへんリアルに墨染めの衣を着た僧が合掌しているように見える。もうひとつの雪形である三本歯の万能歟は常念坊の向かって左に、常念坊と交替するよう出現する。写真は二つの雪形の交替期のもので、向かって右に出た歯が一本余計だが、これはやがて消失する。
〔見ごろ〕 常念坊 三月下旬～四月中旬
万能歟 五月中旬～五月下旬



蝶ヶ岳の蝶

常念岳の常念坊(右)と万能歟

感動を活かし

足もとをみつめて

高橋利雄

定年退職した昭和五十七年秋のこと、大町市内の友人から辰野町のゲンジボタル養殖地視察の誘いを受けた。子供の頃から辰野松尾峡のゲンジボタルは青白い玉の光となって空飛ぶ話を聞いていた。一度は見たいと思っていたので参加させてもらうことにした。

この視察を通し、辰野に負けないゲンジボタルの里づくりが必ず実現できる確信を得、私の住む大町市平野口大出地区ではさっそく住みよい村づくり委員会を発足させ、みんなが自信を持って村を語れる、そんな願いをこめて次のような事業計画を話し合った。

市役所前に集まったメンバーは市の職員、小中学校の先生、保健婦さん、生徒十数名でみんな夢を追う人の顔に見えた。松尾峡に着すると、今日の案内役を務めてくださる辰野中学の勝野重美教諭と町役場職員一行を迎えてくれた。

養殖地は柵で囲まれ、入口の天然記念物指定地と書かれた立派な看板が目を引いた。養殖施設は約二〇〇坪の減反田を利用したもので、川幅二二〇cm、水深三〇cmの曲りくねった水路に隅から塩ビのパイプで取水する簡単な仕組みのものである。中には無数のカワニナとゲンジボタルの幼虫が生息しているという。見学の後には中学校へ戻り、勝野先生、役場職員から話を聞いた。戦後一時は絶滅とまでいわれた辰野のゲンジボタルを町民と行政が一体となって名実ともにここまで復活させた立役者、勝野先生の情熱には頭が下がる思いだった。今年も六月中旬には辰野ホタル祭が催される。県下はもとより、全国各地からの十数万の見物客で賑わうことだろう。



大出の湧水地帯と筆者

- ①有識者を呼んで大出を診断してもらう
↓実現 信大教養部 玉井袈裟男教授
- ②立山黒部アルペンルート・オープンカーニバルに参加 ↓実現 大正時代の百姓姿で
- ③上原段丘下遊歩道の設置 コース↓大姥堂
- ④山の神様―大出宮温泉―市民浴場―老人福祉センター―上原遺跡―大町温泉郷
↓一部実現
- ④イワナ・ヤマメの湧水利用による人工孵化
北安中部漁協とタイアップ↓実現
- ⑤井出の沢支流のイワナの自然産卵視察場所の設置↓未実現
- ⑥大出湿地帯内におけるミズバショウの生育試験↓実現
- ⑦大出湿地帯のゼンソウ群生地内へのミズバショウの混植↓実現
- ⑧鹿島川右岸堤防内側湧水地帯へのミズバショウの植え付け↓実現
- ⑨カワニナの増殖とゲンジボタル養殖試験
↓実現
- ⑩山の神様(敷地約一ヘクタール)地籍傾斜地へのオオヤマザクラの植樹↓実現
- ⑪オオヤマザクラ、ミズバショウ実生苗木の育生↓実現
- ⑫鹿島川左岸堤防のオオヤマザクラ並木街道
↓未実現

以上私共大出住みよい村づくり委員会は、常に話し合いの中で実現可能なものから逐次実行している。

大町市が二十一世紀へ向けて更なる発展を願うならば、目先の経済的メリットこそ優先させるべきとの認識を改め、市民とのコンセンサスを得る中で悔いのない策を一日も早く施すことを願ってやまない。(大町市在住)

博物館だより

秩父宮様・積有恒氏の登山装備が寄託
このたび日本山岳会から秩父宮様ご使用の登山靴・毛手袋・雪眼鏡の3点と、積有恒氏の昭和31年マナスル遠征時の軽登山靴などの登山装備25点などが寄託され、一部を4月21日から第一展示室「山と登山」のコーナーに常設展示しました。(写真)



積有恒氏の装備

秩父宮様の装備

特別展のご案内

○動物写真画展

6月16日(日)～6月23日(日) 講堂で

去る5月6日、市内小中学生を中心に博物館周辺で行われた写生大会での全作品一四四点を展示。
(本展のみ無料)

山と博物館第36巻第5号

発行所 長野県大町市 TEL0267-2211
印刷所 大町市山岳博物館
大町市山岳博物館
大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、三〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四一)三三九三三